

## 入選

## テーマ2..誰かのために、私ができること 「自分だけの救いを差し伸べて」

山形県立致道館高等学校1年 早川陽斐

静寂の中、私の声だけが響き渡る。全員が私の方を見て私の話を聞いている。これまでにない快感と緊張感。私の人生の第二章の始まりだった。全ての始まりは小学六年生の秋。私はずっと心の中にある強力な不安に悩まされていた。だが、不安なんて誰にでもあると、とにかく誤魔化して過ごしていた。けれど、成長するにつれて心の違和感は増すばかり。中学二年生の夏には私はもう別人の様に不安に取り憑かれていた。毎日不安に苛まれ、狂ったように誰かに「大丈夫だよね？」と聞く姿は正気の沙汰ではなかっただろう。私はついに自分で病院に行く決心をした。そこで告げられたのは「強迫性障害」。聞いたことのない病名だった。だが、不思議と怖くはなかった。私の不安に名前がついて安心したのを覚えている。強迫性障害は簡単に言えば、あることが不安で気になって仕方なくなり、その不安を解消するための行動がやめられない病気だ。例えるならば、誰しも家を出るとき、鍵をかけたか確認をするだろう。それを異様なまでに繰り返し、遅刻をするなど、日常生活に支障がでるのが強迫性障害だ。例えば、私の人生はこの病気に振り回され続けている気がする。新型コロナウィルスが流行した時には、感染の不安から手洗いやめられなくなり、人間関係のもつれからくる殺人事件のニュースを見た時には、人から殺されることに強い不安を持っていた。私の人生はこの病気のせいであちやくちやにされていた。私はこの病気に支配されながら生きていくのかと半ば諦めていた。月に一回の通院は大好きな部活を休んで行ったし、薬の影響の眠気でまともに聞けない授業を巻き返すために勉強だつてたくさんした。普通に生きることがこれほどまでに難しいのかと絶望していた。

受験生になり、毎日勉強と格闘していた頃、私は運命の出会いをした。

夏休み直前、一枚のお便りが配られた。「少年の主張大会」その七文字は私を強く惹きつけた。自分の思いを伝える。その時の私には怖かったはずだ。人に怯えていたあの頃の私にはあまりにもハードルが高すぎる。だが、何かに誘われるように私は原稿を書き出していた。あまり理解の浸透していない私の病気。伝える使命があると思ったのだ。私の病気のこと、辛いこと、たくさんの人に知ってほしいこと、止まらなかつた。ようやく書き上げた原稿はボロボロになるまで読み込んだ。とにかく人に伝わるように。誰かに伝われば、同士である強迫性障害患者を少しでも救えるかもしれない。そんなひとひらの希望を持って本番に臨んだ。

私は一番最後だった。他の出場者が発表している中、私の鼓動は高鳴っていた。緊張と期待。名前が呼ばれ、壇上にかかる。とにかく必死に私は伝えた。強迫性障害患者が感じている苦しみを懸命に伝えられた。大きな達成感が私の身体を駆け巡ったのを今でも鮮明に覚えている。大会が終わった後、私のもとに一通のメッセージが届いた。

「あなたのお陰で自分の知らない苦しみを知ることができた。勇気をだして話してくれてありがとう。」

感動した。私のたつた六分のスピーチで感動してくれるなんて。もしかしら私でも強迫性障害について理解を広められるかもしれない。一筋の希望がみえた気がした。世界が一気に明るくなった。挑戦してみても心から良かったと思つた瞬間だった。

私は高校生になった今でもスピーチで強迫性障害について伝えている。きつと誰かのためになると信じて私は活動を続けている。どんなに絶望に打ちひしがれていたって、世界は自分次第で明るくなるし、周りを明るくすることだってできる。私は今日も壇上にかかる。誰かのために、私だけの方法で、救いを差し伸べる。